消防団が守る地域の安全
消防団員という地域の安心

火災や災害から住民の生命、身体、財産を守るという郷土愛の精神に支えられた平成の町火消し・消防団。しかし近年は団員数の減少や高齢化などさまざまな課題を抱えています。能登町消防団は、自ら率先して地域を守るという使命を受け継ぐ、若い団員の入団を随時募集しています。

消防団の現状

「自分たちの地域は自分たちで守る」という郷土愛の精神で、地域住民を守るために昼夜を問わず消防活動にあたる消防団員。その活動は、火災における消火活動はもとより、台風、豪雨、地震などの自然災害における救助活動や防除活動、さらに自動車事故などの事故災害における救助、救出活動など、住民の生命、身体、財産を脅かすあらゆる災害に対処します。

消防団は、全国で2584団、分団数23946、団員数90万人（平成18年度消防白書）となっており、能登町には16分団、307人の消防団員がいます。

消防団が抱える全国的な課題としては**①団員数の減少②団員の高齢化③サラリーマン団員の増加による昼間の防災力の低下**―などが挙げられます。

能登町消防団の場合、団員数の減少は比較的少ないものの、団員の高齢化が進んでいるため、若い団員の確保が今後の大きな課題となっています。

能登町消防団団員数（H20.10.1）

分団名	団員数（人）
高倉分団	25
宇出津第１分団	15
宇出津第２分団	16
三波分団	18
鵜川分団	23
山田分団	18
神野分団	14
柳田分団	20
上町分団	22
岩井戸分団	18
小間生分団	17
松波分団	25
小木分団	24
白丸分団	15
秋吉分団	16
不動寺分団	16
消防団本部	5
合　計	307（定員 343）

消防団の活動状況

消防団活動の特徴には**①地域密着性**（地域の住民や事情に通じている）**②要員動員力**（多数の団員の動員が可能）**③即時対応力**（災害時に即時に対応可能）―などがあり、まさに地域防災の中核として活動しています。また、日ごろから訓練を行ったり、特別警戒活動を実施するなど、災害に備えた地道な活動も行っています。

消防団員の身分

職業を持ちながら災害時などに活動する消防団員の身分は特別職（非常勤）の地方公務員です。消防団への入団は本人の自由意志により、団長以外の団員は、町長の承認を得て消防団長が任命します。

消防団活動は団体で活動することが原則であり、現場での指揮命令系統をはっきりさせるために①団長②副団長③分団長④副分団長⑤部長⑥班長⑦団員―という全国的に統一された階級制度をとっています。

消防団員の処遇

消防団員の給与は、町の条例で定められています。火災や災害で出動したとき、訓練大会などに出動したときには、出動手当が支給されます。

消防団員の活動は危険と隣り合わせという面があり、活動中に不慮の事故による死亡や負傷する場合もあります。このような公務災害に備えて、町、県、日本消防協会などが補償制度を設けています。

また、消防団員が退職した場合には、勤続年数や階級に応じて退職報償金が支給されます。

地域の安心として

「消防団に入って地域の人と気軽に話ができるようになった」とある若い団員は話します。消防団に入団することは、地域とのつながりを持つということでもあります。

災害が発生した場合、自分たちの地域に消防団員がいるということ、職場に消防団員がいるというだけでどれだけ心強いことでしょうか。

消防団員は地域にとっての宝物です。古里のために、地域のために活動する消防団を応援しましょう。

消防団に関する問い合わせは能登消防署☎62－0492まで

平成19年中消防団員出動状況

区　分	出動件数（件）	述べ人数（人）	活動内容
火災	12	416	建物・山林
救急	0	0	
救助	2	57	交通事故など
風水害等の災害	7	445	台風・地震・高潮など
演習訓練	56	7,035	定例出動・防災訓練・操法練習など
広報・指導	38	307	夜間広報・春秋パレードなど
警防調査	0	0	
火災原因調査	0	0	
特別警戒	3	60	年末年始特別警戒
捜索	9	182	行方不明者の捜索
予防査察	0	0	
誤報等	0	0	
その他	56	883	警戒活動、団幹部役員会・会議など
合　計	183	9,385	

消防団員の報酬

	団長	副団長	分団長	副分団長	部長	班長	団員
報酬（年額）	72,000 円	63,000 円	29,000 円	24,000 円	22,000 円	19,000 円	17,000 円
出動手当（１回）※	3,000 円	2,800 円	2,700 円	2,600 円	2,500 円	2,400 円	2,400 円

※災害で出動した場合は 700 円を加算

手まり作品展で外務大臣賞を受賞

川端 信子さん（市之瀬）

Kawabata Nobuko

手まりは丸いから難しい、丸いからおもしろい—。

日本の伝統文化・手まり

千年以上の歴史があり、日本各地で独特の作り方やデザインがある伝統文化「手まり」。この手まりを芸術文化として継承していくために活動するNPO法人「日本てまり文化振興協会（以下協会）」が2年に一度開催する作品展で川端信子さん＝市之瀬＝制作の手まりが、優秀賞となる外務大臣賞を受賞した。

2年前には最優秀賞の文部科学大臣賞も受賞している川端さん。協会発行の写真集でも巻頭に作品が紹介されている。

川端さんの手まりは伝統を継承しつつもその独自性が国内外で高く評価されている。今年の春には協会理事長を務める山東（さんとう）昭子（あきこ）参議院議員が、来日したチュニジアの議会議長に川端さん作の手まりを贈った。5月には、ワシントン国立国会図書館・児童文学館長夫妻が自宅を訪れ手まりを鑑賞した。その際に手渡した手まりが皇后美智子さまに献上されたということだ。

手まりを芸術的に

輪島市出身で二十歳のときに上京、平成9年まで東京で暮らしていた川端さんと手まりとの出合いは30年前。ある日、知人が趣味で制作したという手まりを見せてもらった。「最初その手まりを見たときには、『子どものころ親が作ってくれたな』と懐かしい感じがしました。でもただ作るだけではおもちゃでしかありません。手まりを芸術的なものに近づけることができればおもしろいと考えました」。

早速、川端さんは東京都内で手まりの教室を探す。当時は東京でも手まりの教室はなかなか見つからず、手まりの本を探してその著者の弟子が開く教室に通うことにした。

初めて手まり教室に参加したとき「これは自分に合う」と感じたという。もともと糸と針が好きだった川端さんは、この後15年近く、毎週この教室に通って手まり作りの腕を磨いた。

昭和63年には㈶日本手工芸指導協会の師範免状を取得し、いろいろな団体の教授や講師を務めるようになった。

基本は土台作りから

手まりは、直径6センチほどの丸い発泡スチロールの芯に糸を巻いて土台を作り、金色の糸で分割（地割り）したあと、さまざまな糸を使って幾何学模様をかがる。川端さんによると土台作りが大切なのだという。

「丸い土台を作ることができるまでが最初の修行です。うまく巻くには数をこなして経験を積む必要があります」と小刻みに土台を動かしながら糸を巻く技術を披露してくれた。

現在は一カ月2個のペースで手まりを作っているという川端さん。直径約20センチの大きさで3日、これまでの作品で最大の直径約50センチの手まりの場合は3カ月を費やしたそうだ。

「完成してもほとんどが納得いきません。完ぺきだと思う出来は、10年に一度くらいですね」と笑う川端さん。その最高傑作が2年前文部科学大臣賞を受賞した作品「苧環（オダマキ）」だ。

この作品のレプリカが、オーストリアの伯爵夫人に贈られた。その後、「格別の美しさを持つ贈り物、手まりをありがとう。作者にぜひ会いたい」という直筆のメッセージをもらった記念の作品でもある。

自由に遊び心をもって

「手まり作りの魅力は『丸い』こと。丸いから難しくもあり、おもしろくもあるんです」と手まりの魅力を話す。

「設計図を描けばきれいにできますが、わたしは描きません。イメージに合わせて糸を選び、手まりに写していくのです。あくまでも趣味の世界。自由な遊び心が大事ですから」。

川端さんは手まり作りを楽しみながら、独自性のある発想で手まりの可能性を広げている。

【PROFILE】かわばた・のぶこ

昭和54年	日本手まりの会に入会し本格的な創作活動を開始
昭和63年	㈶日本手工芸指導協会の師範免状取得、各種団体の教授、講師を務める
平成16年	NPO法人日本てまり文化振興協会講師として創作活動を展開
平成18年	協会主催作品展で最優秀賞・文部科学大臣賞を受賞
平成20年	協会主催作品展で優秀賞・外務大臣賞を受賞

【写真上】自宅の一室には川端さんがこれまで制作してきた色とりどりの手まりが展示されている。寄贈や寄付することも多く、手元にある手まりは100個ほど。
【写真左】平成18年の作品展で最優秀賞である文部科学大臣賞を受賞した作品「苧環（オダマキ）」。川端さんの30年にわたる手まり作りの中で、最も気に入っている作品。

秋の能登町は楽しいイベントいっぱい！

第22回
猿鬼歩こう走ろう健康大会

猿鬼伝説ゆかりの地を歩いたり走ったりして楽しむイベント「猿鬼歩こう走ろう健康大会」が9月21日に行われ、県内外から約1500人が参加しました。

この大会は距離や年齢によって分けられた20部門から好きな種目を選んでエントリーすることができます。自分の体力に合わせて小さな子どもから最年長の87歳のお年寄りまで、一緒に参加して爽やかな汗を流しました。

自然豊かな秋の景色を満喫しながら、家族や友人と手をつないで歩く姿もみられ、ゴール地点では満足そうな笑顔がはじけました。

【猿鬼走ろう歩こう健康大会結果】

▶ハーフマラソン高校～49歳男子　①原田歩（金沢市）1:13:28 ②中田武宏（金沢市）③北川昌秀（金沢市）**▶ハーフマラソン50歳以上男子**　①北渡（津幡町）1:25:57 ②山口弥八（中能登町）③新出光男（珠洲市）**▶ハーフマラソン高校生以上女子**　①西野直美（富山県）1:37:56 ②坂本さちこ（金沢市）③松田小夜子（金沢市）**▶10㎞高校生～49歳男子**　①﨑出光（穴水町）0:34:49 ②本間貴幸（白山市）③坂下眞一（青翔高校）**▶10㎞50歳以上男子**　①松山和能（津幡町）0:39:39 ②久利須隆（金沢市）③下川総一郎（金沢市）**▶10㎞高校生～49歳女子**　①虎谷友江（かほく市）0:46:10 ②寺嶋朝子（金沢市）③井戸田由佳（輪島市）**▶10㎞50歳以上女子**　①酒谷洋子（珠洲市）0:48:19 ②駒井キミ子（羽咋市）③山添正枝（七尾市）**▶5㎞高校生～49歳男子**　①垣内和彦（珠洲市）0:16:42 ②山下侑太（布浦）③郷原康樹（輪島市）**▶5㎞50歳以上男子**　①新保外志秋（能美市）0:17:13 ②岡田雅宏（珠洲市）③中村守（内灘町）**▶5㎞高校生～49歳女子**　①石田良子（柳田）0:22:47 ②吉岡智子（宇出津）③中谷はるか（青翔高校）**▶5㎞50歳以上女子**　①綱島由美子（七尾市）0:23:57 ②天方陽子（金沢市）③山本栄子（羽咋市）**▶3㎞高校生以上男子**　①川田悦士（富山県）0:09:43 ②毛利健志（七尾市）③北村正則（小木）**▶3㎞高校生以上女子**　①信田紗由里（柳田）0:13:25 ②国永英代（珠洲市）③井上奈緒（珠洲市）**▶3㎞中学生男子**　①小泉森（富山県）0:10:39 ②須磨翔太郎（柳田中学校）③蟹暁（小木中学校）**▶3㎞中学生女子**　①長谷川楓（中能登町）0:12:15 ②長谷美亜（金沢市）③山口千夏（中能登町）**▶3㎞小学生男子**　①田中健祐（中能登町）0:11:26 ②瀧野皓仁（中能登町）③林大雅（中能登町）**▶3㎞小学生女子**　①村牧瑞希（羽咋市）0:12:17 ②金森愛（柳田小学校）③石田夏那（柳田小学校）

第21回
イカす会

イカを使った町おこしでイカの消費拡大を狙おうと始まった「イカす会」は今年で21回目を迎えました。会場となった県漁業協同組合小木支所には、地元町内会や商店などのテナントがずらりと軒を並べていました。

テナントでは、イカ団子汁やイカ焼そばなどのイカづくしメニューのほか、大相撲能登場所のために来町していた地元出身力士たちによる「イカちゃんこ鍋」も振る舞われ、会場を訪れた約5000人はイカの町ならではの味を堪能していました。

恒例のイカダコンテストとレースにはそれぞれ趣向を凝らした力作12隻が参加し、観客の目を楽しませました。このほか、地元園児や小学生の鼓笛隊、ブラスバンド演奏、よさこいなどが披露されイベントに花を添えました。

【イカダレース結果】①浜風シニア②三和会③浜風ロートル

【イカダデコレーション結果】①UP北極海の流氷と白くま号②下浜盛隆会（イカ力士）イカ鵬③小木小学校B

❶用意されたイカ450匹！生きたイカが泳ぐプールに飛び込み制限時間2分で行われたイカのつかみ取り
❷イカがたっぷり入った「イカお好み焼き」は大好評。完売するまで行列が途切れることなくスタッフは大忙し
❸大相撲能登場所にちなみ巨大なイカ力士が登場！

第4回
全国凧（たこ）あげ能登大会

凧愛好家らが自慢の凧をあげて競い合う「全国凧あげ能登大会」が10月19日、柳田植物公園で開催されました。

大会は「親子児童の部」「全国有名凧の部」「能登ふれあい凧あげの部」の3部門で行われ、町内はもとより、全国各地から150人が参加しました。会場の芝生広場では、小さな凧をあげている親子連れや、自分たちで描いた大きな凧をあげる児童たちの元気な声が響いていました。

また、競技の合間には一本の糸で凧を操作して、人がかぶっている帽子を落とす妙技を披露する場面も見られ、会場を大いに盛り上げていました。

この日は多くの凧が能登の秋空を彩りました。

❶大相撲能登場所のためにと「日本の凧の会やなぎだ支部」が制作した横綱白鵬と朝青龍を描いた6畳凧。会場に展示されたあと、希望者を募り協力して空高く舞いあげた
❷子どもたちも凧あげに挑戦。うまく凧があがると自然と笑顔に

10月

まちの出来事

第13次真脇遺跡発掘調査現地説明会
真脇縄文人の日常生活に迫る

▶高田館長の説明に聞き入る参加者

▼炉に縄文土器が敷かれた土器敷き炉であることが確認されました

現在、史跡公園として整備が進められている真脇遺跡の第13次発掘調査報告が真脇地内の調査現場で行われました。説明会には関係者や地元住民など約20人が集まり、発掘調査された住居跡や炉跡の説明を受けました。

今回調査した住居跡と炉跡は、敷かれた土器から縄文時代中期中葉から中期後葉で、同じ場所で6回も炉を作り替え、それぞれ数回床を張り替えていることが分かりました。これは全国的にも類を見ないもので、この場所に重要な意味があったのではないかと考えられます。

真脇遺跡縄文館の高田館長は「今後はさらに調査区を拡張し、遺跡の広がりも確認したい」と話していました。

能登杜氏例大祭
今年の酒造りの成功を祈願する

酒造りの神様をまつる松波の松尾神社で10月6日、能登杜氏組合能登町支部の例大祭が行われました。神社には組合員や関係者など約30人が集まり、今年の酒造りの成功と安全を祈願しました。

日本4大杜氏の一つに数えられる能登杜氏は、秋から春にかけて県内はもちろん、関西地方や東海地方など日本各地の酒蔵に出向き日本酒を造ります。能登町支部長の西尾宏一さん（61歳）＝内浦長尾＝は「酒造りは体が資本の仕事、健康に気をつけて良い酒を造りたい」と意気込みを話していました。

西尾支部長に合わせ祈願する能登杜氏の皆さん

みんなで心を合わせて一生懸命演奏する児童たち

音楽の集い
信じて歌って素敵なハーモニー

10月22日、柳田小学校で音楽の集いが行われ、町内6つの小学校の5年生138人が参加しました。児童たちはこの日のために練習してきた合唱2曲、合奏1曲を披露しました。

他校の児童と初めて同じ曲目で歌声を合わせた子どもたち。最初は少し緊張気味で小さかった声も、指揮者の先生の指導で徐々に大きくなり、最後には美しいハーモニーを会場内に響かせていました。また、合奏曲「キリマンジャロ」ではそれぞれの楽器で音の強弱をしっかり表現していました。プログラムの最後は中国楽器二胡（にこ）の奏者、李彩霞（りさいか）さんの演奏を鑑賞しました。

能登エコ・スタジアム2008
里山里海の環境でエコを考える

里山里海の文化を色濃く残す奥能登2市2町を会場に、環境を考えるフォーラム「能登エコ・スタジアム2008」が9月13日から15日にかけて開かれました。能登町では「能登バイオエコツーリズム」と「キノコ山を活用した里山保全」が行われ、県内外から訪れた参加者が能登の自然と向き合いました。

このうち、ペレット製造体験では実際に山からカヤを刈り取り、乾燥させたものをペレット燃料に変えました。参加者からは「奥能登の資源を使った、人間生活と自然の持続可能なすばらしい取り組みだ」と絶賛の声が聞かれました。

ペレット製造を体験する参加者

御霊に手を合わせる町遺族会の益田副会長

戦没者追悼式・慰霊式
命の尊さと平和への誓いを胸に

日清戦争以来の1455柱の霊を慰める戦没者追悼式。今年は10月10日に内浦第二体育館で行われ、参列した350人が戦争で亡くなった人たちの冥福を祈りました。式辞では持木町長が「今日の繁栄に尊い犠牲があったことを忘れず、次の世代に語り継ぎます」と述べ、霊前に花を捧げました。

このあと、町遺族会連合会が主催する慰霊式が仏式で行われました。慰霊式は神式と毎年交互に行われています。遺族会の益田英治副会長は、参列者にお礼の言葉を述べるとともに「今後も町の発展のために貢献していきたい」と霊前に誓いました。

能登ふるさと博「猿鬼伝説を歩く」
猿鬼講が150年の時を越え復活

当日の行念寺で江戸時代末期まで行われていた「猿鬼講」が、9月28日に行われた能登ふるさと博のイベント「猿鬼伝説を歩く」に合わせて、約150年ぶりに再現されました。

猿鬼講は、毎年春秋の2回、猿鬼大明神の像を参集者に公開し、住職が伝記を読み上げるというもので、安政6年（1859年）の大火で像や伝記が焼失して以来途絶えていました。

イベントには金沢市などから7人が参加。岩井戸神社で谷坊貴美子さんが猿鬼伝説を語り聞かせた後、行念寺で住職代理の西田秀演さんが伝記の写本をもとに猿鬼講を再現しました。

参加者を前に伝記の写本を読み上げる西田さん

田の神様にまつわる話を情緒たっぷりに話す谷坊さん

奥能登のあえのこと特別展
世界無形遺産あえのことの世界

ユネスコ無形文化遺産（世界無形遺産）に登録される予定の「奥能登のあえのこと」特別展が柳田教養文化館で10月4日から11月1日まで開催されました。

特別展では、写真や図書、映像などを使って、奥能登だけに受け継がれているあえのことを紹介。4日には「とんと昔の会」の「かたりすと」である谷坊貴美子さん＝上町＝が「田の神様のはなし」と題して口演し、自分が子どものころに経験したあえのこと神事の模様や、あえのことの日に毎年祖父から聞いていたという昔話を披露しました。